新　刊

□河口慧海（著）・奥山直司（編）：**河口慧海日記** 2007. A5 判 . 314 pp. 2007. ￥1,050．講談社学術文庫．ISBN: 978-4-06-159819-5 C0123.

ヒマラヤ，チベット探検の先覚者として，河口慧海の名を知らぬ者はないだろう．2004 年，遺品の中から慧海の第一回チベット旅行の日記が発見された．1900 年 3 月に中部ネパールのツァーランを出発してから，ラサ滞在中の 1901 年 12 月で終わっている．編者らは研究チームを組織して，その整理・解読を行った．慧海のチベット行は，その「チベット旅行記」によって世界的評価を得ているが，チベット潜入の径路については漠然とした記述にとどまり，無人の境を単独で踏破したことになっている．このため多くのヒマラヤ関係者が，ネパール，チベットの両側から，「旅行記」の記述を頼りにその径路について探索を行ってきた．ところが「日記」には，潜入の際に通過した地名やコースの状況が詳細に記されていた．近年，彼が滞在・通過したトルボ地域が一般に解放されたことと，この日記の発見とが相まって，トルボのチベット国境に想定された 10 ヶ所近くの峠の比較検討が進み，彼のたどったコースはほぼ確定されるに至った．日記には後日抹消された部分があり，国境通過の前後に多い．念入りに塗りつぶされた中からかろうじて判読された文字から察するに，「ヤク」に関する記述が多いとのこと．このことから編者は，慧海は国境越えにヤク使いの世話になったのだろうと推定している．彼は旅行中に山羊や馬を使っているが，ヤクは熟練者でなければ制御はむつかしいからである．つまり彼のヒマラヤ越えは単独行ではなかったのだが，出版された「旅行記」では，密入国で世話になった人たちへ迷惑をおよぼさないために，径路や地名を隠して単独行をよそおったため，それと辻褄を合わせるために，日記の該当部分を抹消したのだろうと推察している．

日記の地理的記述はたいへん詳しい．地名はもちろんだが，道の方位や難易，傾斜の緩急やその距離，川の方位や流量，橋や徒渉点の様子や水深，飲用水の有無，池の形と周囲長（差しわたしではなく），途上の景観，一日に歩いた距離，集落の戸数，ときには人口や家畜数などが丹念かつ簡潔に記録されている．それも疲労困憊して日記をつけられず，二日・三日分をまとめて記したこともあるのに，同じ几帳面さを維持している．なにか訓練を受けた者のような感じがする．ところがラサ滞在中（つまり歩いていない時期）の記事はきわめてソッケなく，日付だけのまとめ書きが多くなり，しかも「読経した」程度の記事しかない．ダライラマに拝謁した当日のことさえ，10 日も後になって「拝談法王．好遇せらる」とあるだけである．彼の目的からすれば，記すべきことは多いはずなのに ... ．彼の日記を見て感じるのは，これでは兵要地誌ではないか，ということである．こんな日記を日本語でつけていることが露顕すれば，当時のどこの国だろうと，現地官憲は黙ってはいまい．すでにネパール滞在中に，慧海には英国のスパイではないかとの噂がつきまとい，彼はそれを意識して行動していた．それなのに，こういう危険文書を身につけていたということは，決死の覚悟の仏典探究とは矛盾しているように思う．当時は中国へ勢力伸長を競うロシアと英国は，新疆や西蔵の探索に意を用いていた．日露戦争が始まったのは 1904 年だから，大陸進出を目指す日本陸軍も関心を持っていただろう．

慧海の「旅行記」でかねて不思議に思っていたのは，英印当局との接触が全くないことである．「旅行記」によれば，彼はチベット行きの意思を，日本国内ではもとより，インド到着後も隠してはいない．彼がチベット語を学ぶために寄寓し，かつ旅行の途上から日本への手紙の転送を依頼していた S. C. ダス氏は，インド政庁のパンディットだった人物である．Pandit とはヒンズー語で学者・教師を意味する言葉だが，ここではインド政庁がチベットへ潜入させたスパイを意味する．だから彼の行動は，逐一英印政府に把握されていたにちがいない．それなのに，これは日記の圏外の話しであるが，チベットから脱出して来た慧海に接触した形跡はない．ヤングハズバンドのチベット遠征が 1903 年だったことから考えても，慧海の持つ情報は重要だったはずである．後の第二回チベット旅行（1913–1915）の時も同様である．このあたりは，インドや英国の文書について，まだ探究の余地がありそうだ．（金井弘夫）